

Title	Sukhāvativyūha(梵文無量壽經)の研究 : 流通偈を中心にして
Author(s)	福井, 真
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 32 P.1-P.14
Issue Date	1998-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4399
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Sukhāvativyūha (梵文無量壽經) の研究

—流通偈を中心にして—

福井 真

[1.1 はじめに] Sukhāvativyūha (梵文無量壽經、以下Sukh) は大乘仏教初期の成立と言われている。前半部分ではDharmākara (法蔵) 菩薩が誓願 (praṇidhāna) を立てて修行をする物語が、後半部分ではDharmākaraが成仏してAmitābha/Amitāyus (阿弥陀仏) となり、誓願において自ら望んで建設した仏土Sukhāvātī (極楽) の描写が語られる。

Sukhにはその翻訳として、『阿彌陀三耶三佛薩樓壇過度人道教』(『大正藏』、12巻、300a-317c、以下『大阿』)、『無量清淨平等覺經』(同、12巻、279b-299c、以下『覺經』)、『無量壽經』(同、12巻、265c-279a、以下『壽經』)、『無量壽如來會』(同、11巻、91c-101c、以下『如来会』)、『大乘無量壽莊嚴經』(同、12巻、318a-326c、以下『莊嚴經』)、そして蔵訳が存在する¹⁾。これらはそれぞれAmitābha/Amitāyusの前世の誓願の数が異なり、『大阿』、『覺經』は24願、『壽經』、『如来会』、梵本は48願、蔵訳は49願、『莊嚴經』は36願を数えるが、經典の発展につれて誓願の数が増加したと結論することは簡単ではない²⁾。

諸訳における韻文群の存在の有無は次のようになる(○：対応あり、—：対応なし、数字は詩節数；以下で東方偈、流通偈という場合は梵本のそれを指し、諸訳においては梵本の東方偈、流通偈に対応する部分の意味)。

表のように、六つの韻文群(經典の末尾に縁起法頌を一偈含む梵文写本

表1	帰敬偈	讚仏偈	重誓偈	聞信偈	東方偈	流通偈
大阿	—	—	—	—	—	—
覚経	—	○	—	—	○[連続：20+11]	
寿経	—	○	○(11)	—	○[連続：20+10]	
如来会	—	○	○	—	○	○
莊嚴経	—	○	○	—	○	○
蔵訳	—	○	○	○(7)	○	○
梵本	2	10	12	5	21	10

あり)のうち、東方偈と流通偈は『大阿』に無く、『覚経』以降から現われるが、両偈は『覚経』と『寿経』で連続して存在し、他の訳本で流通偈は經典の最終部に移されている。両偈の関係を考察することは、Sukhの經典としての展開を探る上で重要である。東方偈については既に研究を行ない、その成果は発表済みなので³⁾、本稿ではテキスト批判に基づく流通偈の分析を中心に、流通偈と東方偈の関係について考察する。

[1.2 梵本における流通偈及び東方偈の概要] 流通偈はAjita (阿逸、阿逸多、弥勒、慈氏) に対する釈迦の言葉として語られる。第一偈：これまで述べて来たことは福德を行った者たちだけが聞くことができる。—第二偈：正覚者、光明を作る者を見、教えを聞いた者たちは最高の喜びを獲得する。—第三偈：劣った者たちには諸仏の教えに対する浄信はない。前世に諸仏を供養した者たちは諸仏の実践を学んだ。—第四～五偈：独覚、声聞、衆生たちは仏の智慧を知らない。ただ、仏のみが仏の美質を見通すことができる。—第六～七偈：たとえ衆生が仏となっても、仏の智慧を計ることはできない。—第八偈：それ故に賢明なる人は仏が見通していることを知る。—第九偈：人間存在、仏の出現、信仰、智慧は得難い。それ故に勇猛邁進力を起こせ。—第十偈：勝れた教えを聞き、覚りへの意欲を起こす者たちは、過去世において我々の友人であった。

東方偈はĀnanda (阿難) に対する釈迦の言葉として語られ、Sukhāvatiに集まり来った菩薩たちの利得の多いことを述べて、Sukhāvatiに赴

くことを勤めるというのが大まかな趣旨である。

[2.1 梵本における流通偈の語形について] 東方偈と同じように、流通偈も一般に仏教混淆サンスクリット語 (Buddhist Hybrid Sanskrit、以下 BHS) と言われる、中期インド語の特徴を色濃く残す言語が用いられている。流通偈に見られる語形はほぼ東方偈のそれに準ずるが、特に重要と思われるものについてのみ以下にまとめる。

東方偈と同じく流通偈でも *-am > u* という語形変化が見られる: 7c *pramāṇu* (acc. sg. nt.) (Pischel §351, §364; von Hinüber 1986, §297; Brough 1962, §75; BHSG §8.30)。Cf. 4b *kutu* (< *kuto* < *kutas*; BHSG §3.51-53)。

gen. pl. *a*-stemとして3d *lokanāthām* という語形が見られる。第三偈cd句は次のようになっている。

<i>ye pūrvabuddheṣu akārṣu pūjām</i>	--U--UU-U--
<i>te lokanāthām caryāsu śikṣiṣu</i>	--U--UU-U-UU

前(世)の仏たちに対して供養を行ったところの者たち、
彼らは世界の守護者たちの諸々の実践に関して学んだ。

異読に *lokanāthāna* があるが、例えば写本 Ky (写本の説明については藤田本、上巻、vii頁以下参照) は *tai lokanāthāna caryāsu śikṣiṣu* (--U--U--U--U-UU) と第七音節が長となり、流通偈としては異例な韻律形態になる (triṣṭubh と jagatī の混合形、以下 tri./jag.)。よって、R など多くの写本が示す *ṅnāthām* を本来の読みとして認めざるを得ない。この場合、後続の *caryāsu* に *-r,y-* という svarabhakti を認める必要がある。

後の *śikṣiṣu* の目的語として期待されるのは acc. 或は loc. であり、この場合は、*caryāsu* (loc. pl. f.) が学ぶべき内容であるから、*lokanāthām* は acc. pl. m. ではなくて、gen. pl. m. と考えるべきである (Edgerton 1936, pp.42; BHSG §8.124)。

また、第十偈で passive 形である *labhyate* が active の意味で用いられ

ているのが注目される。

<i>ya idrśāṃ dharmā ś'ṛṇitva ś'eṣṭhāṃ</i>	U-U--UU-U--
<i>labhyanti p'itīm sugataṃ smarantaḥ /</i>	--U--UU-U--
<i>te mitra-m asmākam atīta-m-adhvani</i>	--U--UU-U-UU
<i>ye buddhabodhāya janenti c^handam //</i>	--U--UU-U--

このような勝れた諸々の教えを聞いて、
善逝を憶念しつつ、喜びを獲得し(?)、
仏の覚りの為に意欲を生ぜしめる者たち、
彼らは、過去世において我々の友人 (であった)。

異読も全て passive 形を示し、写本の誤りとして単純に排除はできない。同じような現象が Sukh の散文部分にもう一箇所見られる⁴⁾。√*labh*に四種動詞の活用が(特に中期インド語に)存在した可能性があるが、筆者は見出すことが出来なかった(PW s.v. labh; BHS §28.26-28; cf. Geiger §136ff.)。causative 形の Pa. *labbheti*, *labbheti* (Skt. *lambhayati*)などの影響を受けた可能性もあるが、これについては更に検討が必要である。

中期インド語では語頭の二重子音は単子音の価値を持つ(Pischel §268; Geiger §51.2, §66.1; von Hinüber 1986, §162)。ただし、本来存在した二重子音が韻律の要請により母音の後で保持される、或は再び現れる場合がある(Geiger §74.1; von Hinüber 1986, §162)。また、複合語の後肢の語頭の二重子音は、原則的に語中の二重子音と同じ扱いであるが、独立した語の語頭の二重子音と同様に単子音として現れることもある(Pischel §196, §268; cf. Geiger §51.2, §67)。

流通偈における二重子音の取り扱いも基本的に上記に倣っており、語頭の二重子音は基本的に単子音の価値であるが、二重子音の価値を保持する例が8d (jagati)の冒頭に見られる：*buddha prajānā*「仏たちは見通している」。ここでは書写年代が古く、重要な写本R, N1, Kyが*buddha*を示す。流通偈の tri./jag. の第二音節としては長が適当であり、*prajānā* の語頭の二重子音 *pr* は二重子音の価値と見ざるを得ない。東方偈では 16a

kṣetram が明らかに二重子音の価値を持つ。

また、九例の複合語の後肢の語頭の二重子音うち、特定の複合語における二重子音 *jñ* の二例 (8a *viññajātiyah*, 9c *prajñā*) が明らかに二重子音の価値を示すだけで、他の例は (*jñ* も含む) 単子音の価値であるか、或は確定できない。先の中期インド語の原則とは異なり、明らかに二重子音を示す例が少ない点は注目に値する。東方偈の場合は、五例のうち三例 (5b, 20c *amitaprabhasya*, 16d *jātismarāh*) が明らかに二重子音の価値を示す。

次に、*saṃdhi* については基本的に BHS §4.1ff. に記述されている内容に準ずるが、全体を通じて一貫した規則に従っているわけではない：e.g. 3a *hīnebhi* (v.l. *hīnehi*) *kuśīdadrṣṭibhiḥ* など。hiatus は、場合によっては *saṃdhi-consonant* を伴い、韻律に応じて適宜保持されている (*saṃdhi-consonant* を伴わない例：1b *bheṣyanti idrśāḥ*, 1d *śroṣyanti imām*; *saṃdhi-consonant* を伴う例は先に引用した第十偈に見られる：10c *mitra-m asmākam atīta-m-adhvani*)⁵⁾。

写本の系統については既に発表しており、今回の分析結果もそれに準ずるが、新たに判明したものについて若干付け加える：T6 と S は同じ写本グループであり、S の方がサンスクリット語化がより進んだ語形を示す (例えば 1b *bheṣyanti* に対して、T6 *bheṣyanti*, S *bhaviṣyanti*); 9c **kṛtsnām* に対する *tsnām* (As), *tsnā* (C, K2, H2, K9) は、一音節脱落している [+]*tsnām* (Ro) に基づいたものである可能性が高く、これらの写本は近い関係にあるのではないかと考えられる。

[2.2 梵本における流通偈の韻律、並びに東方偈との比較] 流通偈の十詩節中、最初の二つの詩節は śloka で書かれており、どちらも正規形である。残りの八詩節 (32 pāda) は tri./jag. で書かれている。

東方偈の二十一詩節中、第二偈、第四偈は mātrāchandas 類 (vaitāliya,

aparāntikā) で、後の十九詩節は tri./jag. で書かれている。

tri./jag. についてはこれまで多くの研究があるものの、成立の相対年代を決定できるような比較方法は見出されていない。筆者も現時点で明確な見解を持っている訳ではないが、ここで流通偈と東方偈の tri./jag. の特徴の差異を検討することは、両偈のみならず、BHSの文献における tri./jag. を理解する点でも有益であろう。

tri.とjag.は基本的にそれぞれ十一音節と十二音節の韻律で、古典期に至るとtri.は indravajrā (--U--UU-U-U \underline{U} ×4) や upendravajrā (U-U--UU-U-U \underline{U} ×4) など、jag.は indravamśā (--U--UU-U-U \underline{U} ×4) や vamśasthā (U-U--UU-U-U \underline{U} ×4) などの形に固定される。indravajrā と upendravajrā、或は indravamśā と vamśasthā の pāda が一詩節中に混在する場合は upajāti と呼ばれる。古典期に至る以前の段階のパーリ仏典やBHSで書かれた文献の tri./jag. は一般的により制限のゆるやかなものであった (Warder pp.202ff.; Edgerton 1936, pp.39ff.)。特に先に述べた tri.とjag.の混合や、第一音節、第四音節、第五音節における resolution (- → UU) などがその大きな特徴として知られている⁶⁾。

両偈における tri./jag. の scheme は全く同じであり、tri.-pādaはX-U-XUU-U-U \underline{U} 、jag.-pāda はX-U-XUU-U-U \underline{U} である (Xの箇所はU/-/UUの何れも可)。第四音節におけるresolutionは見られない。

流通偈に現れる特徴的な現象は、tri.-pādaとjag.-pādaの混合：第七偈以外；resolution (第一音節)：6a, 7c；第五、六、七音節がUUU：8bd。

東方偈にも同じような特徴が見られるが、それぞれ頻度が異なる。以下では比較のため、同じく tri./jag. で書かれており、明らかに東方偈、流通偈より新しい成立⁷⁾と考えられる聞信偈 (五偈) のデータも挙げる。

tri.とjag.の混合については明らかに流通偈の割合が高い。明らかに成立の遅い聞信偈の割合も東方偈より高いことから、tri./jag. の混合は直線的

表 2	聞 信 偈	東 方 偈	流 通 偈
tri. と jag. の混合	80% (4/5 verse)	47.37% (9/19 verse)	87.5% (7/8 verse)
resolution (第一音節)	5% (1/20 pāda)	6.58% (5/76 pāda)	6.25% (2/32 pāda)
resolution (第五音節)	5% (1/20 pāda)	3.95% (3/76 pāda)	0% (0/32 pāda)
第五、六、七音節 UUU	5% (1/20 pāda)	9.21% (7/76 pāda)	6.25% (2/32 pāda)

に減少して行ったものではないと考えられる。

次に、resolution (第一音節) に関しては、微妙な差で東方偈、流通偈、聞信偈の順で割合が低い。resolution (第五音節) に関しては、流通偈に用例がなく、流通偈、東方偈、聞信偈の順で割合が高い。第五、六、七音節のUUUについては、東方偈、流通偈、聞信偈の順で割合が低い。聞信偈は明らかに他よりも成立が遅いので、時代が下がるに従ってresolution (第五音節) が多くなり、resolution (第一音節) と第五、六、七音節のUUUが少なくなるということになるが、resolution (第五音節) の点では流通偈、東方偈、聞信偈の順で成立したということになり、他の特徴が示す東方偈、流通偈、聞信偈という順序とは異なる結果となる。

以上のことから、韻律の点から東方偈と流通偈の成立の前後関係を判断するのは困難であると言わざるを得ない。実際には微妙な差異しかないので、ほぼ同時期の成立と見るのが無難かもしれない。また、このような特徴の比較 (cf. Warder §283) が tri./jag. の成立年代の判定にどれだけ有効かという点については今後さらに検討する必要がある。

また、caesuraに関しては、上の三偈だけを見れば、それぞれの韻文全体を通じて支配するような規則はないものの、resolution (第五音節) が起こっているpādaでは第四音節の後に来るようである。第五、六、七音節がUUUのpādaでは、明らかに第五音節の後に来るか、第四音節の後とも第五音節の後とも解しうるもののどちらかである。

[3 流通偈、対応する散文部分、そして東方偈について] 上述のように、『覚経』及び『寿経』では流通偈は東方偈と連続しており、独立した韻文

群としては存在しない。

梵本では、東方偈は Sukhāvati に集まり来った菩薩たちの利得の多いことを述べ、聴衆であるアーナンダたちに対して Sukhāvati に赴くことを勧めるという内容である。流通偈は仏の智慧の無量であることを述べ、信心と智慧を獲得するために勇猛邁進せよというのがその要旨である。東方偈は具体的で完結した物語の形であるのに対して、流通偈は抽象的で、東方偈とは内容上の繋がりほとんど見られない。

また、『覚経』、『寿経』の流通偈に相当する箇所冒頭では、「非有是功德人 不得聞是經名」(『覚経』、『大正蔵』、12 卷、288c10)、「若人無善本 不得聞此經」(『寿経』、『大正蔵』、12 卷、273a28) とある。これに対応する梵文は、*lab neme akṛtapuṇyānām śravā bheṣyanti idrśāḥ* 「福德を作ったことのない者たちには、このようなこれらを聞くことは生じないであろう」となっており、必ずしも「経典」という意味ではないが、『覚経』や『寿経』だけを見れば、経典の途中に現れる文章として奇妙である。このような表現は経典の最終部に存在するのが相応しいと思われる。

梵本における流通偈の直前の散文部分は、経典の最終部としてこれまでに説いて来た経典の受持、読誦等を勧め、仏の智慧などに対する疑いを戒め、経典をアジタに附託するというのが大まかな内容である。

『覚経』では流通偈中に「設令滿世界火 過此中得聞法」(『覚経』、『大正蔵』、12 卷、289a1) という文があるが、これに対応する文章は散文には見られない。流通偈自体が存在しない『大阿』にはこのような表現はどこにもない。ところが、『寿経』の流通偈中には「設滿世界火 必過要聞法」(『大正蔵』、12 卷、273b17) という文があり、これに対応する「設有大火 充滿三千大千世界。要當過此。聞是經法」(『大正蔵』、12 卷、279a3-4) という文が同訳の最終部分散文に見られる⁸⁾。『大阿』と『覚経』の散文部分は経典の全体を通じて一言一句酷似する。極言すれば、『覚経』は『大

阿』に東方偈、流通偈だけを挿入し、散文部分は『大阿』とほぼ同内容が保持されているため、『覚経』に流通偈と最終部散文との対応がないことは重要ではない。それよりも、『寿経』において、流通偈とそれとは離れて存在する経典の最終部分に明確な対応がある点が重要である。これを偶然と見るよりも、本来経典の最終部分に存在した流通偈が、何らかの理由で東方偈に連続する位置に挿入されたと考えるのが妥当と思われる。

『覚経』に流通偈と経典の最終部散文との対応がないことを見れば、『覚経』の形式のように本来東方偈に連続して流通偈が存在した可能性は否定できない。しかしながら、『如来会』、『莊嚴経』、藏訳、梵本では流通偈は経典の最終部分に位置し、さらにこれまで見つかった多くの梵文写本に『覚経』、『寿経』のような形式を示すものが全く存在しない現状では、流通偈は本来最終部分に位置していたと判断せざるを得ない。

流通偈と東方偈の関係という点からは外れるが、流通偈に対応する散文部分について幾つか注目すべき点を挙げる。

明確な対応を欠くが、『如来会』、『莊嚴経』、梵本、藏訳は経典の書写に言及する。『如来会』：「當令書寫執持經卷」（『大正藏』、11 卷、101a2-3）「讀誦受持書寫經卷」（同、101a8-9）；『莊嚴経』：「於此經典書寫供養受持讀誦」（同、12 卷、326a19-20）；「於此正法受持讀誦書寫供養」（同、12 卷、326a24）；「聞已受持及書寫 讀誦讚演并供養」（同、326b6）；梵本：*antaśa ekarātriṃdivasam apy ekagodohamātram apy antaśaḥ pustakagatāvaropitam api kṛtvā sulikhito dhārayitavyaḥ* /（藤田本 1397-1399=足利本 63,8-10）「少なくとも一昼夜の間でさえもずっと、一度の牛乳搾りの間だけでさえもずっと、少なくとも写本の状態にされたもの、下ろされたものとなして、（その法門が）よく書かれ、保持されるべきである」；藏訳：*chos kyi rnam graṅs 'di ṅid śag gcig tsam yaṅ bzun*

zin bcañs te klags śiñ kun chub par byas la bsam pa thag pa nas gzan dag la yañ rgya cher yañ dag par bśad par bya'o // tha na glegs bam la legs par bris te / bcañ bar bya zīñ de la ston pa'i 'du śes kyañ bskyed par bya'o // (pp.316, ll.19-22) 「他ならぬこの法門を一度だけでも保ち、保持して、読み、全てを（心に）留めることに思いを決してから、他の者たちにも詳細に正しく説明すべきである。書物にまで正しく書き留めて、保持すべきであるし、その時に、先生の想念をも生ぜしめるべきである」；*chos kyī rnam grañs 'di gzuñ ba dañ / kun chub par bya ba dañ / bcañ pa dañ / yi ger bri ba dañ . . .* (pp.318, ll.3-4) 「この法門を保ち、全てを心に留め、保持し、文字に記して…」；*tha na yi ger bris te mchod pa byed pa . . .* (pp.318, ll.16) 「（この法門を）文字にまで記して供養をなすところの者たち…」。

ところが、『大阿』、『覚経』、『寿経』は經典を受持することは述べるものの、書写には言及しない（『大阿』については cf. 静谷 pp.63-64, 99）。『寿経』は「聞是經法。歡喜信樂。受持讀誦」（『大正藏』、12 卷、279a4-5）と「讀誦」に言及し、書写された經典の存在が推測されるが、書写を奨励するまでには至っていない。書写にまで言及する經典は一般的に新しい段階のものと考えられるため（cf. 静谷 pp.42）、それを奨励する異本の梵文原典の成立の新しいことが推測される⁹⁾。

また、梵本の最終部分の散文で *yāvat* 「乃至」が省略を示すものとして使われていることは注目に値する。

api tu khalv ajitātyarthaṃ sulabdhalābhās te sattvā avaropitakuśalamūlāḥ pūrvajīnakṛtādihikārā buddhādhiṣṭhānādhiṣṭhitās ca bhaviṣyanti yeṣāṃ anāgate 'dhvani yāvat saddharmaviṣralope vartamāna ima evaṃrūpā udārā dharmaparyāyāḥ sarvabuddhasaṃvarṇitāḥ sarvabuddhaprasastāḥ sarvabuddhānujñātā mahataḥ sarvajñajñānasya kṣīpram āhārakāḥ śrotrāvabhāsam āgacchanti / (藤田本 1404ff. = 足利本 63,16ff.) 「また他方で、

知つてのように、アジタよ、未来の世において、乃至正しい（人の）教えの破滅が起こる時に、このように広大で、全ての仏たちによって称賛され、全ての仏たちによって称揚され、全ての仏たちによって承認され、大いなる一切智者の智慧を速やかに齎すこれらの教えの言い換え（による説明）（= 法門）が、彼らの耳の領域にやって来るところの衆生たち、彼らは非常に良い利得を得、善根を植え、前（世）に勝者のもとで奉仕(?)を行い、仏の（影響）力に支配された者たちとなるであろう」

*yāvat*の箇所は、例えばVajracchedikā Prajñāpāramitāでは、… *anāgate 'dhvani paścime kāle paścime samaye paścimāyām pañcaśatyām saddharma-vipraloṣa-kāle vartamāne . . .* 「…未来世において、後の時において、後の時間において、後の500（年）において、正しき人の教えの破滅が生ずる時に…」¹⁰⁾ とあり、*yāvat*は省略を示すと考えられる。

諸訳においてはそれぞれ内容が異なる。「我般泥洹去後。經道留止千歲。千歲後經道斷絶。我皆慈哀。持留是經法。止住百歲。百歲中竟。乃休止斷絶」(『大阿』、『大正藏』、12 卷、317c9-11)、「我般泥洹去後。經道留止千歲。千歲後經道斷絶」(『覺經』、『大正藏』、12 卷、299c11-13)、「當來之世經道滅盡。我以慈悲哀愍。特留此經止住百歲」(『壽經』、『大正藏』、12 卷、279a11-12)、「若於來世乃至正法滅時」(『如來會』、『大正藏』、11 卷、101a13-14)、*ma 'oñs pa'i dus na dam pa'i chos rab tu rnam par 'jig pa'i bar du* 「未来の時に正法がすっかり滅びるまでに」(藏訳、pp.318, 11.9)。なお『莊嚴經』には対応する文はないようである。特に『如來會』は梵本の表現と対応し、「乃至」という語句も見られるが、他訳は文意が異なる。*yāvat*という語がこの箇所の成立当初から存在したかは不明であるが、現行の梵文を見る限り、大乘經典の文句が一般大衆に浸透してから後に周知のものとして省略したと考えねばならないだろう。

[4 まとめ] これまで見て来たように、流通偈に関しては成立当初から

『覚経』や『寿経』のように東方偈に連続して存在した可能性は否定はできないものの、それを裏付ける梵文写本が存在しない現状では、梵本のように本来經典の最終部分に存在していたと考えざるを得ない。また東方偈、流通偈の両偈は『大阿』の原典から『覚経』の原典へと展開する間の時期に、ほぼ時代を同じくして成立したのではないかと推測される。

註

- 1) 他にも幾つかの言語による訳本の存在が確認されている。藤田宏達・桜部建『浄土仏教の思想 — 無量寿経 阿弥陀経』、1994年、pp.19-23 参照。
- 2) これについては藤田宏達『原始浄土思想の研究』、昭和45年、京都、pp.386ff.や香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』、昭和59年、京都、pp.49ff.などを参照。
- 3) 福井真「Sukhāvativyūha (梵文無量寿経) 東方偈の研究」、待兼山論叢第29号、1995、哲学篇、pp.1-15。
- 4) 藤田本 1104 (=足利本 50,24)。ここでは写本Rが *pratīlabhyante* (passive) を active の意味で用いている。他の多くの写本は *pratīlabhante* を示す。
- 5) *mitra-m*についてはcf. Edgerton 1936, pp.42; BHSG §4.59. *atīta-m-adhvani*についてはcf. Jātaka (ed. PTS) iii,43,1 (verse) *atīta-m-addhāne*; Mahāvastu (éd. É. Senart) i,271,19, 283,14, ii,209,9 *atīta-m-adhvāne*; BHSG §4.60.
- 6) Cf. Warder §277; Edgerton 1936, pp.40; F. Edgerton, "Meter, Phonology, and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit," *JAOS*, 66 (1946), pp.197-206 (特に§10, 36); K. Régamey, *Three Chapters from the Samādhirājasūtra*, Warsaw, 1938, pp.12, 66 (note 53); H. Smith, "Les deux prosodies du vers bouddhique," *Bulletin de la Société Royale des Lettres/Årsberättelse, Kungl. Humanistiska Vetenskapssamfundet I Lund*, Lund, 1950, §8.3.
- 7) 聞信偈は梵本と蔵訳にしか存在せず、Sukhの中에서도遅い段階に成立したと考えられる。聞信偈第一偈(藤田本 911-912=足利本 pp.41, ll.4-23)は流通偈第六偈に酷似するが、これは聞信偈の方が先に存在していた流通偈を模倣したものであろう。
- 8) 他の訳本のうち、『如来会』では最終部散文に「假使經過大千世界滿中猛

火…」(『大正藏』、11 卷、101a7-8) や「設入大火不應疑悔」(『大正藏』、11 卷、101a10) とあるが、韻文中には対応はない。『莊嚴經』では散文に「假使三千大千世界滿中大火…」(『大正藏』、12 卷、326a26) とあり、流通傷中にこれに対応する「假使大火滿三千…」(『大正藏』、12 卷、326b8) という表現が見られる。

梵本では散文に *dharmaparyāyasya śravaṇāya trisāhasramahāsāhasram api lokadhātum agniparipūrnam avagāhyātikramyaikacittotpādam api vipratīsāro na kartavyaḥ* / 「この教えの言い換え (による説明) を聞くために、(人は) 火で満たされた三千大千世界にさえも入り込んで、越え赴いた後に、一度の心の生起の間でさえも後悔がなされるべきではない」(藤田本 1389-1391=足利本 62,24-63.2) とある。

蔵訳では散文に *ston gsum gyi ston chen po'i 'jig rten gyi khams mes yoñs su gañ ba las rgal te / chos kyi rnam grañs 'di mñan par bya'o* // 「火ですっかり満たされた三千大千世界を越えて、この法門を聞くべきである」(pp.318, ll.1-3)、或は *ston gsum gyi ston chen po'i 'jig rten gyi khams mes yoñs su gañ ba de rgal nas kyañ 'gyod pa dañ ldan pa'i sems gcig kyañ bskyed par mi bya'o* // 「火ですっかり満たされた三千大千世界をその者が越えてからも、後悔のある心を一度でも生ぜしめるべきではない」(pp.318, ll.6-7) とあるが、流通傷中に対応はない。

『如来会』、梵本、蔵訳は流通傷中に上のような表現が見られない点で一致する。現存の梵文写本の何れにもこのような表現を流通傷中に含むものはないが、『覚経』、『寿経』、『莊嚴經』が流通傷を翻訳する際に揃って改作したということは考え難く、現存の梵文写本以外に別のヴァージョンが存在したのではないかと推測される。

- 9) この点から見れば、『莊嚴經』(36 願経) の原典の成立は比較的新しく、24 願経と 48 願経 (特に『寿経]) の間の成立であると見ることは難しい。
- 10) *Vajracchedikā Prajñāpāramitā* (ed. E. Conze) 30,16ff. (= ed. M. Müller 22,10ff.); 他にも *Saddharmapuṇḍarīka* (ed. H. Kern and B. Nanjio) 282,10ff.; *Samādhiraśasūtra* (ed. N. Dutt) iii,490,12ff.; *Śikṣāsamuccaya* (ed. C. Bendall) 104,10ff. (*Adhyāśayasañcodana-sūtra*) などにも見られる。*pañcā-satī* の解釈には種々の説がある。この点については A. Yuyama, “*pañcāsatī*, “500” or “50”? —with special reference to the Lotus Sutra —,” *The Dating of the Historical Buddha*, Part 2, ed. by H. Bechert, *Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*, Philologisch-Historische Klasse, Dritte Folge, Nr.194, S.208-233 参照。

複数回引用した参考文献

- 足利本： A. Ashikaga, *Sukhāvativyūha*, Kyoto, 1965 (東方偈：pp.44, ll.1-pp.47, ll.9; 流通偈：pp.64, ll.19-pp.65, ll.29; 流通偈に対応する散文：pp.63, ll.16-pp.64, ll.18)
- 静谷： 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』、昭和49年、京都
- 蔵訳： 河口慧海「蔵和对訳無量寿経」、『浄土宗全書第23巻』、pp.213-339 (東方偈：pp.290, ll.6-pp.292, ll.16; 流通偈：pp.320, ll.3-ll.18; 流通偈に対応する散文：pp.316, ll.12-pp.320, ll.2)
- 大正蔵： 大正新脩大藏經
- 藤田本： 藤田宏達『梵文無量寿経写本ローマ字本集成』、上巻(1993)、下巻(1993)、補遺(1996)、東京 (東方偈：下巻 pp.971-1012、補遺 pp.319-333; 流通偈：下巻 pp.1427-1446、補遺 pp.469-475; 流通偈に対応する散文：下巻 pp.1404-1426、補遺 pp.461-468)
- BHSG： F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, Volume I: Grammar, New Haven, 1953
- Brough： J. Brough, *The Gāndhāri Dharmapada*, London, 1962
- Edgerton 1936： F. Edgerton, "The Meter of the Saddharmapuṇḍarīka," *Kuṅṅpuswami Sastri Commemoration Volume*, Madras, 1936, pp.39-45
- Geiger： W. Geiger, *Pāli Literature und Sprache*, Strassburg, 1916 (*Pāli Literature and Language*, tr. by B. Ghosh, Calcutta, 1943)
- von Hinüber 1986： O. von Hinüber, *Das ältere Mittelindisch im Überblick*, Wien, 1986
- Pischel： R. Pischel, *Grammatik der Prākṛit-Sprachen*, Strassburg 1900 (*A Grammar of the Prākṛit Languages*, tr. by S. Jhā, Delhi, 1981)
- Warder： A. K. Warder, *Pali Metre*, London, 1967

(大学院後期課程学生)